

地域医療連携 News

平素より中国労災病院患者サポートセンターが大変お世話になり、誠にありがとうございます。
虫の声に深まる秋を感じる頃となりました。先生方におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。
地域医療連携News第172号を発行致します。今後とも連携の程よろしくお願い申し上げます。

中国労災病院理念

患者中心の良質な医療の提供と地域医療への貢献

中国労災病院の基本方針

- 個人の尊厳と権利を尊重し、高度で安全な医療を推進します。
- 地域の医療機関と連携し、救急・急性期から慢性期までの一貫した医療を実施します。
- 高度専門的な医療に基づいた勤労者医療を進めます。
- 周産期医療を充実させ、未来を担う子供たちを支援します。
- 優れた人材を育て、働きがいのある職場を作ります。

初期臨床研修の理念

当院の初期臨床研修の理念は、崇高な信念と人格をもち、基本的な診療能力及び生涯にわたり自己研鑽する態度を身に付けた自立した医師を育成することです。

初期臨床研修の方針

- ①患者中心の思考・行動をする姿勢を持つこと。
- ②救急医療やプライマリケアなどの診療能力を修得すること。
- ③他の医療スタッフと協調し、安全で質の高いチーム医療を提供すること。
- ④地域のかかりつけ医と連携し地域完結型の医療を学ぶ。
- ⑤症例を通じて、診断・治療の結果だけではなく、プロセスを学ぶ。

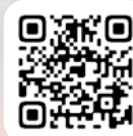
1. 連携医療機関のご紹介

今年から、当院外来インフォメーション前にて、大型モニターを設置し、当院の連携医療機関を地区ごとに掲載したスライドショーを流しております。



医療機関の詳細にアクセスできるQRコードが掲載されたご案内用紙も患者さんに配布しております。

メティグルQR



連携ニュース原稿募集

当院では、呉、東広島、竹原地区を主とした約300の医療機関に2か月に1回「連携ニュース」をご案内させていただいております。

今回「連携ニュース」に先生方のクリニックの紹介を掲載するコーナーを作成することにいたしました。

ぜひご寄稿をお願いいたします。

なお、写真、文章込みでA4 1ページ以内で、お願いいたします。

お問い合わせは、下記までご連絡をお願いいたします。

申込先：E-mail:renkeijimu@chugokuh.johas.go.jp 担当：患者サポートセンター 服部

今後も連携医療機関のご案内、広報に努めてまいりますのでよろしくお願い申し上げます。

2. 物事をゆがめて認識する現象：『認知バイアス』

医療上のミスは、取り巻く環境、システム、個人の認識、コミュニケーション、患者、のお互いが交わる場所のどこでも生じます。今回はそのうち個人の認識に焦点を当て、エラーの原因を述べてみます。

自らは好んで間違った行動を起こすことはありません。普通はそれを望まないからです。現実には次々と判断を迫られる状況で、あらゆるところに認識をゆがめる種が潜んでいます。その種は多くは、人であるからこそ有すもので、人が生存する上で有用なものであり、人が集団生活を始めた古来受け継がれてきたものです。

我々は五感を通じて外界の状況や他人からの言葉を取り入れ、現状の解釈・認識を行い（認知）、自分の頭の中に収められている記憶と照合し、計算やシミュレーション、そして推論等の思考を行い、全体をイメージします（マッピング）。それらから考える最良のものを決定し行動に移します。この一連の行動（入力、脳内処理、出力）に横やりが入り、ゆがみ生じます。これが認識のゆがみ＝認知バイアスなのです。一連の行動を言葉で一言一句紡ぎ、取捨選択し、確かめながら、時間をかけて行動に移せば、認知バイアスが入り込む余地はありません。しかし忙しい職場で判断に時間はかけられません。我々には今までの知識や経験や積み重ねや成功体験が山ほどあります。一瞬のうちに頭の中に作られたおおざっぱなイメージから、即行動や即言葉に表す事が出来ます。先の入力から出力の流れのどこかをバイパスする事もあります。利用可能性ヒューリスティックスという認知バイアスです。大体こんなものかなという80点主義の応答です。後で振り返るとほとんど多くが無意識に行われています。インシデント報告を書きながら、「なぜこんな事をしたか自分でも説明がつかない」、「〇〇だと勘違いした」、など経験された方も多いでしょう。

頭の中の積み重ねの取出しを間違っても（呼び出しミス）出力は変わったものになります。

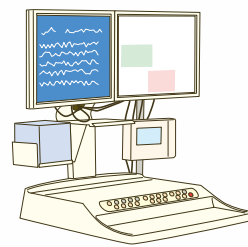
頭の中にマッピングされたイメージを言葉で表す難しさは、簡単な図形が書かれた絵を隣の方に言葉だけで伝えるゲームで感じる事ができます。意思を伝える難しさは、言葉だけの伝言ゲームで全く正しく伝わらない事で経験できます。こんな危うい状況下スタッフ間での『情報を共有』が、そこそこに可能なのはチーム内である程度共通の背景（フレーミング）を有しているからです。しかしながら共通の背景と思っていたものが実はそうでなかったことで認知バイアスを生みます。同業種のもの同士でもこれですから、医師と患者など全く背景が異なる状況では『説明はしたけど全く理解されていなかったという現状』が理解出来るような気がします（情報の非対称性）。説明者はそのことを十二分に理解する必要があります。

平成11年1月11日、横浜市大で肺と心臓手術をされる患者の取り違えが発生しました。いろいろな悪い偶然が重なったとはいえ、その中で心臓を担当した麻酔科医師は術前診察時と患者の髪形が違う？と不審を抱き、病棟に患者が手術室に出たかと確認の電話をしました。さらに麻酔後、経食道心エコーで僧帽弁が正常化していました。麻酔をすると正常化することもあるに違いないと自分を納得させたそうです。認



医療安全管理室
室長

日高 昌三



知的不協和という辻褃合わせのバイアスです。手術室で心臓チームが同じ方向を向いているときに、自分一人が『この人違うのでは??』との発言は困難を極めたに違いありません。心臓はドキドキだったでしょう。集団浅慮バイアスまたは集団同調性バイアスといいます。ただ、それさえあつたら……。そのチーム内のキャリアの違い、年齢の違い、権威勾配が発言の邪魔をしたかもしれません。

このように認知バイアスだけでも多くのミスを生じさせる下地となっています。遠い過去から受け継がれているということは、バイアスは有用なんでしょう。ある書によると、バイアスは単なる認識エラーではなく、人間が自分の周囲の出来事を自分にとって意味のある形で認識し理解しようとする際に必然的に生じる副産物だとしています。取り除くことは出来ませんが、状況によっては減らす努力は出来ます。自分の状況を第三者的に俯瞰して、今の状況はバイアスが入り込む余地があるのではないかと考えるのです。忙しいとき、疲れたとき、次にすべきことが控えているとき、業務が中断されたとき、非常に緊張しているとき、何も考えなくとも物事がどんどん進むとき……。選択的注意、またはメタ認知で軽減できるとされています。

何某かミスをした際に、上記の認知バイアスが関与していなかったか、自分で振り返ってみることは、今後同様のミスを減らす上で、自分の傾向を理解する上でも有用かもしれません。

普通は上記の様な認知バイアスによるミスを本人は気付きません。それを誰かがなんら気兼ねすることなく指摘したり、その本意を正したりすることによって、重大な間違いへの道を閉ざすことは可能かもしれません。チーム内で十分なコミュニケーションが出来ている必要がありますし、日本人が得意とする同僚への『心遣い、気遣い』によっても可能かもしれません。それがいとも簡単にできる、あなたの職場は『心理的安全性』が高い組織なのかもしれません。

業績を上げている企業は心理的安全性が高いと言われています。近ごろ良く耳にしますが、2000 年ころ論文で提唱された言葉です。その概念はすでに 20 世紀後半には航空機安全運行の目的でコックピット内では必須とされていました。すなわち効果的なチーム、優れたチーム内では自分が発言することを恥じたり、拒絶されたり、罰をあたえられることがないと、確信をもっている状態をさし、医療現場においてはあらゆる部門に適応できると考えます。年齢差、キャリア、職種の違う人間がチームを作る医療の場、特に侵襲的な治療、処置、検査を必要とする現場（集団浅慮バイアス、権威勾配が生じやすい）では、患者安全に必須と思われます。横浜市大のケースでも適応できたかもしれません。是非ともおかしいなと思ったら、躊躇うことなく、Speak Up（手を上げて発言）してください。

心理的安全性が高い組織では可能なはずです。

参考

ヒューマンエラーの心理学（ちくま新書） 一川 誠

バイアスとは何か（ちくま新書） 藤田 政博

認知バイアス 心に潜むふしぎな働き（ブルーバックス） 鈴木 宏昭

横浜市立大学医学部附属病院の医療事故に関する中間とりまとめ

横浜市立大学医学部附属病院の医療事故に関する事故対策委員会

<https://www.yokohama-cu.ac.jp/kaikaku/BK3/bk3.html>

賢い人がなぜ決断を誤るのか？（日経 BP） オリヴィエ・シボニー

恐れのない組織―「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす（英治出版） エイミー・C・エドモンドソン



3. 当院の認定・専門看護師紹介♪

認知症とは、脳の病気や障害など様々な原因により、認知機能が低下し、日常生活全般に支障が出ている状態をいいます。

認知症の症状には、「中核症状（認知機能障害）」と「行動・心理症状」の2種類があります。「中核症状」とは、記憶障害や見当識障害などを指し、脳の機能低下が原因で、認知症の方々には必ずみられる症状です。「行動・心理症状」には、妄想や抑うつなど様々な症状がありますが、中核症状に伴って生じる症状のため、必ず現れるものではなく症状も個人差が大きいのが特徴です。

当院では認知症ケアチームを結成し、私はその一員として活動しています。週二回、各病棟をラウンドし、チームメンバー（医師・医療ソーシャルワーカー・薬剤師・管理栄養士・臨床心理士など）と病棟スタッフでカンファレンスを行っています。一人ひとりの症状は何か、どうすれば穏やかに笑顔で過ごす事ができるのかなど、具体的なケアのアドバイスをを行います。

また、院内デイケアを導入し、ラジオ体操や季節の工作、風船バレーなどを行い、患者さんが笑顔で過ごす時間が少しでも増えるよう取り組んでいます。

認知症の方々が穏やかに笑顔で過ごせる社会を目指し、院内・院外ともに活動の場を広げていきますので、今後ともよろしくお願い致します。

認知症看護認定看護師 山下 喜美子



4. NPO法人卒後臨床研修評価機構（JCEP）による認定病院となりました

卒後臨床研修評価機構（JCEP）は国民に対する医療の質と向上を目指すため、臨床研修病院における研修プログラムの評価や、研修状況の評価を行い、臨床研修病院のプログラムの改善、医師の養成に寄与することを目的として設立されたもので、第3者のサーベイヤーによる評価を行う機関です。

このたび、2021年10月1日付けで同機構の基準を満たす臨床研修病院として、当院が認定されました。広島県内で3病院目の認定です。

今後もさらに質の高い臨床研修病院を目指し、研修医の育成に努めてまいります。



令和3年10月1日現在

